

【 復活トロパリ 第8調 】

めぐみふかきしゅよ、なんぢはたかきより
恵深主、爾た高
くだり、みっかのほうむりをうけて、
降三日葬受
われらをくるしみよりときたまえり、
我等苦釋給
わがいのちとふくかつなるしゅよ、こう
我生命復活主光
えいはなんぢにきす。
榮爾歸

【 日本の亜使徒ニコライのトロパリ 第4調 】

しととひとしくどうざなるもの、ちゅう
使徒等同座者忠
じつにしてしんちなるハリストスのえきしゃ、せい
實神智の役者聖
なるしんにえらばれたるふえ、ハリストスのあい
神撰笛愛
にみちたるうつわ、わがくにのこう
満器我國光
しよおしゃ、あしとしゅきょうせいニコライ
照お者亜使徒主教聖
よ、なんぢのぼくぐんのたあめ、および
爾羊群爲及

ぜんせかいのたために、いのちをたもうせい
 全世界 爲 生 命 賜 聖

さんしゃにいのりたまえ。
 三者 祈 給 え。

【 日本の亜使徒ニコライのコンダク 第4調 】

こうえいはちちとこおとせいしんにき
 光 榮 父 子 お と 聖 神 歸

す、

せいせいしゃあしとせいニコライよ、わが
 成 聖 者 亞 使 徒 聖 我

くになんちをたびびとおよびいほうじんとうけ
 國 爾 旅 人 及 異 邦 人 受

しに、なんちははじめわがくににおいておの
 爾 初 我 國 於 己

れをがいらいしゃとしりたれども、ハリストスの
 外 來 者 知 れ ども 、 ハ リ ス ト ス の

ひかりとあたたかきをながし、なんちのて
 光 暖 流 爾 敵

きをぞくしんのことなあし、かれらにか
 屬 神 子 爲 あ し 、 か れ ら に か 神

みのおんちょうをあたえ、ハリストスのきょうかいをたて
 恩 寵 與 教 會 建

た り 、 い ま こ の き ょ う か い の た め に い の り
 今 此 教 會 爲 祈
 た ま あ え 、 け だ し わ れ ら そ の し ょ し は な ん
 給 蓋 我 等 其 諸 子 爾
 ち に よ 呼 ぶ 、 わ が よ き ぼ く し ゃ よ 、 よ ろ こ
 呼 我 善 牧 者 慶
 べ よ 。

【 復活のコンダク 第8調 】

い ま も い つ も よ よ に 、 ア ミ ン。
 今 何 時 世 世
 だ い じ ん じ な る し ゅ よ 、 な ん ぢ は は か よ り ふ く
 大 仁 慈 主 爾 墓 復
 か つ し て 、 し せ し も の を お こ し 、 ア
 活 死 者 興
 だ ん を ふ く か つ せ し め た ま え り 。 エ ヴ ア は な ん
 復 活 給 爾
 ち の ふ く か つ を た の し み 、 せ か い の は て
 復 活 樂 世 界 極
 は な ん ぢ が し よ り お き た る を い わ う 。

司祭) (黙誦： 聖なる神、 聖者の中に息い、 セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、

ヘルヴィムより讚榮せられ、 悉くの天軍より伏拝せられ、 萬物を無より有と

なし、 人を爾の像と肖とに依りて造り、 爾が諸の賜を以て之を飾り、

ねが もの ちえ めいご あた つみ おこな もの す そのすくい ため つうかい
願う者に智慧と明悟とを與え、罪を行 う者を棄てずして、其 救 の爲に痛悔

た われらいや ふとう なんぢ しょぼく こ とき おい なんぢ せい
を立て、我等卑しくして不當なる 爾 の諸 僕を、此の時に於ても、 爾 が聖な

さいだん こうえい まえ た なんぢ どうぜん ふくはいさんえい たてまつ た もの
る祭壇の光榮の前に立ちて、 爾 に當然の伏拝讚榮を 奉 るに堪うる者と

しゅさい なんぢみづか われらざいにん くち せいさん うた う なんぢ じんじ
なしし主宰よ、 爾 親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、 爾 の仁慈を

もつ われら のぞ われら およ じゆう じゆう つみ ゆる わ たましい からだ
以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が 靈 と體と

せい われら しょうがいぜんこう もつ なんぢ つと え たま せい
を聖にし、我等に生涯善功を以て 爾 に務むるを得せしめ 給え、聖なる

しょうしんぢょ こせい なんぢ よろこび な しょせいじん きとう よ
生神女と古世より 爾 の喜 を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、)

司祭) けだしわ かみ なんぢ せい われらこうえい なんぢちち こ せいしん けん いま いつ よよ
蓋 我が神よ、 爾 は聖なり、我等光榮を 爾 父と子と聖神に献ず、今も何時も世世

に、



【 聖三祝文 】

せいなるかみ、せいなるゆうき、せいなる
聖 神 聖 勇 毅 聖

じょうせいのもものよ、われらをあわれめ
常 生 者 我 等 憐

よ。せいなるかみ、せいなるゆうき、せい
聖 神 聖 勇 毅 聖

なるじょうせいのもものよ、われらをあわれ
常 生 者 我 等 憐

めよ。せいなるかみ、せいなるゆうき、
聖 神 聖 勇 毅

せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ
 聖 常 生 者 我 等 憐
 れ め よ 。 こ う え い は ち ち と こ と せ い し ん
 光 榮 父 子 聖 神
 に き す 、 い ま も い つ も よ よ 世 世 に 、 ア ミ ン 。
 歸 今 何 時 世 世
 せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ
 聖 常 生 者 我 等 憐
 れ め よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う
 聖 神 聖 勇
 き 、 せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を
 毅 聖 常 生 者 我 等
 あ わ れ め よ 。
 憐

司祭) (黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國
 の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世世に、)

【 **プロキメン** 提綱 主日第8調 】

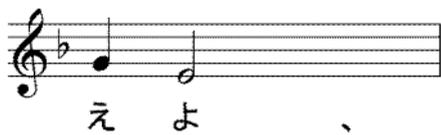
司祭) 慎みて聽くべし、衆人に平安、

誦經) 爾の神にも、

司祭) 睿智、

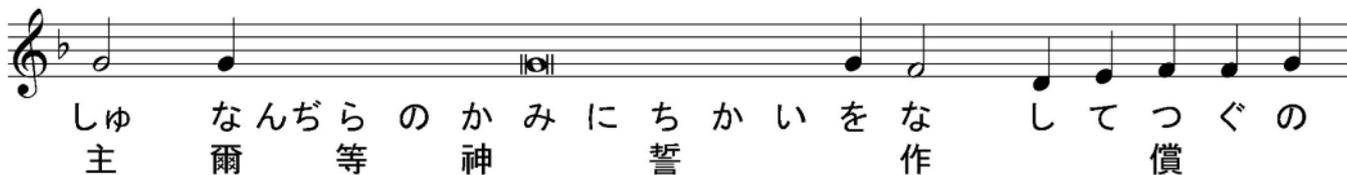
誦經) プロキメン、主爾等の神に誓を作して償えよ、

し ゅ な ん ち ら の か み に ち か い を な し て つ ぐ の
 主 爾 等 神 誓 作 償



え よ 、

誦經) 神はイウデヤに知られ、其名はイズライリに 大なり、



しゅ なんぢら の か み に ち か い を な して つ ぐ の
主 爾 等 神 誓 作 償



え よ 、

誦經) 主 爾 等の神に



ち か い を な して つ ぐ の え よ 、
誓 作 償

【 アポストロス 使徒經 128 端 コリンプ前書 3 章 9 節～17 節 】

司祭) 睿智、

誦經) 聖使徒パヴェルがコリンプ人に達する前書の讀、

司祭) 謹みて聽くべし、

誦經) 兄弟よ、我等は神の同勞者なり、爾等は神の耕えす所の田、神の建つ所の屋

なり。我は神より我に與えられし恩寵に循いて、智なる工師の如く基を置けり、他人

は其上に建つ、然れども各如何に建つかを慎め。蓋置かれたる基なるイイススハ

リストスの外、誰も他の基を置く能わず。人若し斯の基の上に金、銀、寶石、木、草、

稈を以て建てば、各人の工は顯れん、夫の日は之を表さんとすればなり、蓋火に因り

て明ならん、火は各人の工の如何なるを試みん。若し人の建てし所の工存せば、値

を得ん。若し其工焚けば、損を受けん、然れども己は火より脱るるが如く救われん。爾

らあにし、爾等は神の殿にして、神の神爾等の中に居ることを。若し人神の殿を

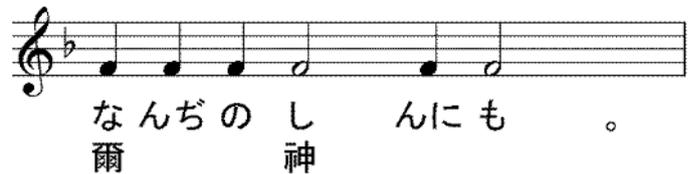
毀たば、神は彼を毀たん、蓋神の殿は聖なり、此の殿は爾等なり。



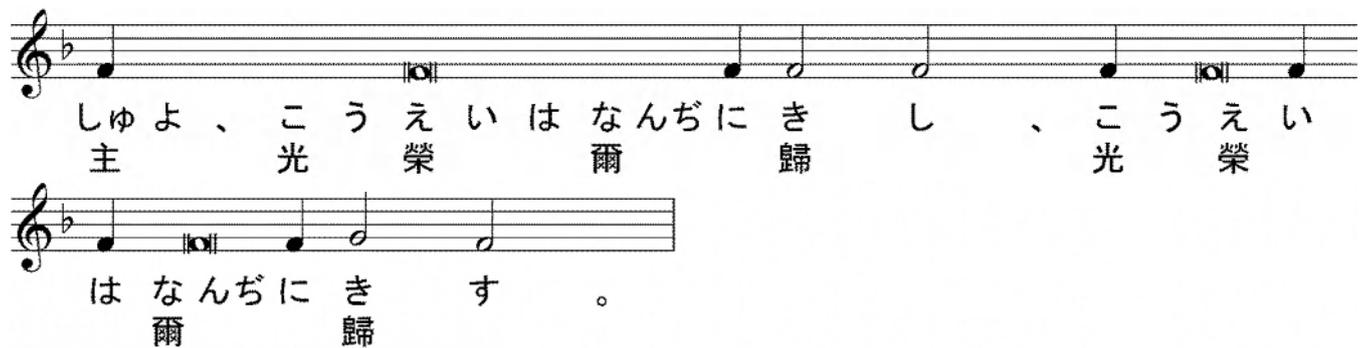
司祭) (黙誦: ^{ひと あい しゅさい わ こころ かみ し ちえ いさぎよ ひかり かがや わ しねん}人を愛する主宰よ、我が心に神を知る智慧の浄き光を輝かし、我が思念
^{め ひら なんぢ ふくいん おしえ さと たま わ うち なんぢ ふく いましめ}の目を啓きて、爾が福音の教を悟らしめ給え、我が衷に爾の福たる誠を
^{おそ おそれ い われら ことごと にくたい よく ふ およ なんぢ よろこ ところ}畏るる畏をも入れて、我等が悉くの肉體の慾を踏み、凡そ爾の喜ぶ所
^{おも か おこな ぞくしん せいかつ す いた たま けだし かみ}を思い且つ行いて、属神の生活を過ぐるを致させ給え、蓋ハリストス神よ、
^{なんぢ わ たましい からだ こうしょう われらなんぢ なんぢ むげん ちち しせいしぜん}爾は我が靈と體との光照なり、我等爾と爾の無原の父と至聖至善にし
^{いのち ほどこ なんぢ しん こうえい けん いま いつ よよ}て生命を施す爾の神とに光榮を獻ず、今も何時も世々に、アミン。)

【 エヴァンゲリオン 福音經 マトフェイ福音書59端 14章22～34節 】

司祭) ^{えいち つつし た せいふくいんけい き しゅうじん へいあん}睿智、肅みて立て聖福音經を聴くべし、衆人に平安、



司祭) ^{でん せいふくいんけい よみ}マトフェイ傳の聖福音經の讀、



司祭) ^{つつし き か とき そのもと うなが ふね のぼ みづか たみ さ}謹みて聴くべし、彼の時イイス 其門徒を促して、舟に登らしめ、自ら民を去ら
^{あいだ おのれ さき か きし ゆ たみ さ のち かれ ぞくしよ おい}しむる間に、己に先だちて、彼の岸に往かしめたり。民を去らしめて後、彼は獨處に於
^{きとう ため やま のぼ すで く ひとりかしこ あ とし ふねうみ なか あ なみ}て祈禱せん爲に山に登り、既に暮れて、獨彼處に在りき。時に舟海の中に在りて、浪
^{ゆ かぜ さか ゆえ よしこう とし うみ ふ かれら ゆ もんとその}に撼られたり、風の逆いし故なり。夜四更の時、イイス海を履みて彼等に往けり。門徒其

うみ ふ み おどろ い こ かいぶつ すなわちおそれ よ よ しか
 海を履むを見て、驚きて曰えり、是れ怪物なり、乃懼に由りて呼べり。然れどもイ
 ただち かれら かた い こころ やす こ われ おそ なか かれ こた
 ス直に彼等に語りて曰えり、心を安んぜよ、是れ我なり懼るる勿れ。ペトル彼に答
 い しゅ も こ なんぢ われ みづ ふ なんぢ いた めい かれい
 えて曰えり、主よ、若し是れ爾ならば、我に水を履みて爾に至らんことを命ぜよ。彼曰
 きた ふね くだ みづ ふ もと ゆ しか かぜ はげ
 えり、來れ、ペトル舟を下り、水を履みて、イイスの許に往けり。然れども風の烈しき
 み おそ おぼ よ い しゅ われ すく ただち て の
 を見て、懼れ、溺れんとして、呼びて曰えり、主よ、我を救え。イイス直に手を伸べて、
 これ たす いわ しょうしん もの なん うたが とも ふね のぼ およ かぜや
 之を援けて曰く、小信の者よ、何ぞ疑いたる。共に舟に登るに迫りて、風息みた
 ふね あ ものつ かれ はい い なんぢ まこと かみ こ すで わた
 り。舟に在る者就きて、彼を拜して曰えり、爾は誠に神の子なり。既に濟りて、ゲン
 ち きた
 ニサレトの地に來れり。

(比較用 口語訳)

その時、イエスは弟子たちを舟に乗り込ませ、向こう岸へ先におやりになった。そして群衆を解散させてから、祈るためひそかに山へ登られた。夕方になっても、ただひとりそこにおられた。ところが舟は、もうすでに陸から数丁も離れており、逆風が吹いていたために、波に悩まされていた。イエスは夜明けの四時ごろ、海の上を歩いて彼らの方へ行かれた。弟子たちは、イエスが海の上を歩いておられるのを見て、幽霊だと言っておじ惑い、恐怖のあまり叫び声をあげた。しかし、イエスはすぐに彼らに声をかけて、「しっかりするのだ、わたしである。恐れることはない」と言われた。するとペテロが答えて言った、「主よ、あなたでしたか。では、わたしに命じて、水の上を渡ってみもとに行かせてください」。イエスは、「おいでなさい」と言われたので、ペテロは舟からおり、水の上を歩いてイエスのところへ行った。しかし、風を見て恐ろしくなり、そしておぼれかけたので、彼は叫んで、「主よ、お助けください」と言った。イエスはすぐに手を伸ばし、彼をつかまえて言われた、「信仰の薄い者よ、なぜ疑ったのか」。ふたりが舟に乗り込むと、風はやんでしまった。舟の中にいた者たちはイエスを拝して、「ほんとうに、あなたは神の子です」と言った。それから、彼らは海を渡ってゲネサレの地に着いた。

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえいは
 主 光 榮 爾 歸 し 光 榮
 はなんぢにきす。
 爾 歸

※聖体礼儀3 (金口イオアン) へ